



『トクシマ・アンツァイガー』

第 12 号

徳島 1915 年 6 月 15 日

どれだけの負傷兵が前線に戻ったか？

このことについて、15 年 2 月 12 日の『ハンブルク通信』は次のように書いている。

最近の戦争での戦場経験によると、ほぼ同じ強さで現代の戦闘技術の面でも同じように教育された敵と遭遇すると、小口径の大砲が導入されたことで負傷者数がかなり大きく増加している。もちろん重傷者の数は比較的減っているが、これに対して軽傷者の数は際立って増えている。そこでおのずから明らかになったのは、現在戦争が長期化することで治癒した負傷者が、以前よりはるかに多く前線に復帰していることである。

ドイツ領南西アフリカでの軍事行動において、88 回の砲撃による 369 名の負傷者のうち、平均 1.7 カ月の治療期間ののち、すでに 46 パーセントが再び従軍可能となった。そしてこれらの負傷は筋肉や内臓などの軟部

ばかりでなく、初めはかなり重く見えたもので、26名は関節や骨、12名が肺貫通、2名は腹部貫通だった。これらの経験は露日戦争の情報と一致している。それによると、小口径砲弾による負傷者で再び前線勤務が可能となった者のうち、71.19パーセントが皮膚や軟部の負傷者、22.44パーセントが骨や関節の負傷者、6.44パーセントが内臓・血管・神経の負傷者であった。ロシア兵と日本兵の負傷者はほぼ60パーセントが前線に戻っているが、1870/71年戦争(普仏戦争)で前線に戻ったドイツ兵はわずか17.6パーセントと算定されている。おそらく当時一般に考えられていたより多くが榴散弾や砲弾のかけらや近接戦兵器(手榴弾を含む)の負傷者で、すばやい治癒が可能だったのだろう。

日本の歴史(11)

足利氏の最後の将軍である義昭は、その時代の戦争で力を得た織田信長に擁立された。義昭は後見人の信長から自立しようとしたが、信長はそれを理由に再び彼を追放した(1573年)。以後30年間、まったく将軍はいなかった。信長はすべての有力な氏族を従え始めた。毛利氏に対する出陣の際に、彼は自分の指揮官の一人に襲撃され没した。信長の総大将だった豊臣秀吉が後を継ぎ全国支配に成功した。彼はさまざまな反乱を抑え、結局最後の反乱の際にもっとも強力な敵である徳川家康と和議を結び、両者は支配を配分し秀吉は家康の長男を養子にした。秀吉はそれまでの課題を終わらせた。彼は改めて国全体を測量させ、新たな税制を布いた。天皇はその功績に対してたくさんの栄誉を与えた。けれども秀吉は、ただの農夫の息子という低い出自のため将軍になることはできなかったが、そのことは彼が権力を振ううえで何の障害にもならなかった。

秀吉は国家を統一すると計画を隣国の支配に向けた。ことに彼は中国と

それに従属する朝鮮を征服しようとした。大軍が朝鮮に侵入しまもなくこの国を征服した。中国軍は朝鮮人に援軍を送り、これに対する戦いは一進一退だった。秀吉が死ぬと日本軍は故国に引揚げ、日本軍はたくさんの犠牲を払ったこの企てから実りある成果を挙げることができなかった(1592-95年)。

秀吉の死後、本来の統治はそれまで彼のライバルだった徳川家康に移行した。けれども反対勢力である秀吉一族を負かすまでには、何よりも激しい戦いが必要で、最後の決着がついたのは関が原の平野においてだった。家康の兵は約7万5千だったが、敵はほぼ13万だった。戦いのさ中に敵将の一人が家康側に寝返り、こうして家康は勝利を収めた。

つづく

砲兵隊の歴史について

われわれ海軍砲兵大隊は、これまでいつも自分たちを聖バルバラのひいきを受けた弟子たちと考えてきた。というのもわれわれは、陸上で使われるあらゆる大砲のうちで「もっとも大きなもの」を扱わねばならなかったからである。それらの砲の武装防衛が必要なわずかな場所でしか、徒歩砲兵の戦友たちが砲の口径でわれわれに匹敵することはなかった。

戦争が始まると、われわれはこうしたトップの座から押しのけられたが、それは、徒歩砲兵が長いこと用心深く隠していた「デブのベルタ」¹を、びっくりしている世界と、ことに不意打ちをくらわされた敵どもに披露したときだった。

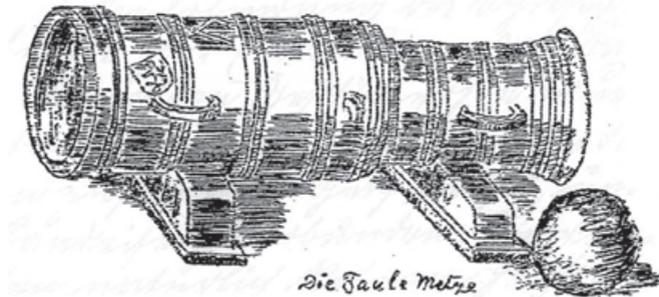
このよきご婦人がそれまでで最も大きな口径のわれわれの大砲をひどく目立たないものにしてしまったからという理由でわれわれが羨望を感じることはまったくない。

1 「42センチ砲」のこと、第3巻第5号「シュピーゲル(鏡)」参照。

われわれが陸軍の仲間をうらやんだのは、彼らだけがベルギーを通りぬけたあの輝かしい勝利の進軍を行い、彼らの（勝利の）月桂冠に、次から次へと新しい葉を編み込めるといふ恵みを受けたことである。それなのにわれわれときたら！

ここでしたいのはセンチメンタルな考察ではないので、われわれのテーマを思い出し砲兵隊の歴史を語ろう。

確かに「デブのベルタ」は、現代の製砲技術のもっとも完成した所産である。けれどもベルタがまさに口径の大きさという点で、「従来無かったもの」という見方は誤っている。この点で、もう500年以上前の1411年にブラウンシュヴァイクで作られた、祖先にあたる「怠け者のメツェ」



にずっと劣っていた。それは60cm以上の口径を持っていたそうである。しかし、両者が比較できるのはこの一点でしかない。なぜなら「デブのベルタ」は、体格の良い兵士の大きさの砲弾を敵の要塞に打ち込み、その砲弾の主たる効果は、恐ろしいほどの爆薬装填量にあるが、「怠け者のメツェ」からは、石の弾しか撃てなかったのだ。たしかにそれは、7ツェントナー(350kg)の重さではあったそうだが。

とはいえ飛距離は滑稽なくらい短かった。ともかく、そのような大砲は、当時としては、われわれの42センチ臼砲が今日そうであるのと同じように、たいへんな驚異であった。メツェは、城や要塞化された都市を包圍攻撃するときには、同様に大いに役立ったことだろう。

今日の意味での砲兵隊が話題になったのはようやく火薬が発明されてか

らだった。

それまでは要塞を打ち負かすための発射器具は、すでに古典時代に使われていた木製のものだった。そう、もう高射角砲や低射角砲が知られていたのだ。ローマ時代の「投石器」や「石弓」はカノン砲に対応し、「オナガー投石器」は榴弾砲や迫撃砲に対応した。壁を崩すには「破壁器」が使われ、もっと強力なものとしては、綱にぶら下がって揺れ動く攻撃角材が使われた。面白いのは発射器具が今日の戦争で再び使われていることで、しかも防御壕への地雷投下器としてである。

火薬の発明が大砲の建造を前進させた。最初の砲身は樽の板のような鍊鉄棒をつなぎ合わせ、たがね（帯金）で留めたものだった。それはもちろん大きなガス圧に耐えることができなかつたので、砲弾にごくわずかの速さしか与えられなかつた。にもかかわらず効果を高めるために、まさに「兎け者のメツツェ」のように強大な口径寸法が作られた。

けれどもしだいにさらに丈夫な砲身が作れるようになり、火薬は改良され石の砲弾は鉄の砲弾に代わっていった。大砲の製造は、当時銃工のツンフトの手にゆだねられていた。このツンフトは、砲手たちも提供していた。これらの銃工たちは、戦争をおこなう当事者たちによって給料で雇われたのである。

それぞれの国が常設の軍隊を持つようになると、砲兵隊も同様の価値を持つ部隊としてこの軍隊の中に位置づけられた。

プロイセンでこの武器の編成を変えたのは、兵隊王フリードリッヒ・ヴィルヘルム 1 世だった。彼は当時支配的だった多彩で多様な口径を止め（大選帝侯の時代にはまだ、ブランデンブルクではカノン砲には 18 のさまざまな口径があり、榴弾砲と迫撃砲には 11 の口径があった）、これからは口径 3・6・12・24 ポンドの 4 つの砲だけを使うようにと命じた。

時代が進むにつれて砲兵隊は少しずつ武器を改造し改良した。けれども次に決定的な変更が行われたのはごく最近のことだった。それは施条砲の導入だった。フランスは 1858 年に初めてこの改革を行い、それによって

翌年のイタリア戦争で大変な優位を手にした。さらに重要な進歩はプロイセンによって初めて導入された。後込め砲の原理である。

後ろから砲弾を込めることで、明らかに命中度が非常に大きくなった。なぜなら後込めでは砲弾は砲腔とちょうど同じ大きさの直径を持つことができたが、前込めのシステムでは砲弾は砲腔より小さくしなければならなかったからである。そうすると砲圧が失われるばかりでなく、砲弾は撃つ際に砲身の中で「ばたばた」し、そのため大きな弾道の狂いが生じた。

それまでは大砲は銅や鋳鉄から作られていたが、プロイセンでは今や鋳鋼に変わった。必要とされる良質のものは、当時はクルップでしか作ることができなかった。

それ以後絶えずシステムの改善が進められた。なかでももっとも注目されたのは、発射の際の砲身後退の導入だった。

こうして一方では性能がよく動かしやすい野戦砲に、他方では海軍や徒歩砲兵、要塞砲兵のためののすさまじい貫通力を持つまさに巨大砲に行き着いた。

まさにこうした重い大砲を作ることにかけては、ドイツの産業はいつも最先端に行くことになった。そこで面白いのは、われわれが 1870/71 年戦争の初めにも敵に似たような驚きを与えたことである。同じような大きな規模ではないにしてもこの戦争でも同様である。当時問題だったのは、その頃は聞いたこともない砲弾の重さが 80kg もある 21 センチ白砲だった。この大砲を持つことで、われわれの部隊も初めて敵に知られるようになった。

ある大砲の効果の大きな部分は、それが撃つことのできる砲弾による。

長い間われわれは火薬の入っていない砲弾しか知らなかった。かなり後になって初めて、それに加えて落下してから炸裂する榴弾を使うようになった。難しいのはそれに相応しい起爆装置（雷管）を作ることだった。とてもたくさんの実験を経てやっと、時間と衝突への反応装置をみずからうちに併せ持つ今日の起爆装置に行き着いた。発明者であるイギリスの

大佐にちなんでシュラップネルと呼ばれている榴散弾は、すでに移動式大砲が導入される前から使われていたが、1871年以降になってやっと一般に普及するようになった。

チンタオのドイツ人とともに (最終回)

政治的関係と射程の点で、チンタオの要塞は旅順の要塞に似ていた。けれども軍事的立場からすると、こちらは駐屯部隊の弱さが歴然としていたので両者はまったく逆だった。例えば堡壘は1900年の義和団の乱の中国の大沽堡壘に由来するもので、カノン砲を装備していた。陸からも海からもひどい砲撃を食らったイルチス山は、6cmから12cmの大砲と2cmから10.5cmの大砲を備えていた。これらの12cm砲のうちの2基は、1870年のパリ包囲の際にすでにドイツ軍が使ったものだった。要塞群は、その位置からしても町と港を守ることができなかった。そのうえ山の多い地域の国境と峠を守るには、さらに何マイルか前に設定された堡壘と5万人の兵士が必要だったろう。となると日本は攻めあぐねたことだろう。もちろんドイツは孤立状態と日本との近い距離のため、チンタオに堅固な軍港を作るのに途方もない費用を費やさなければならなかったことだろう。ある佐官は私に、ここ当分これ以上たくさんのお金を使うことはないだろうと語った。けれどもドイツはすぐに、この皇帝お気に入りの土地のために17年間にほぼ6,000万ドルも支払うことになった。そのうちのほとんどは、ドック・港の建設・行政関係の建物群・道路・植林・海岸の防備施設などに使われた。ドイツは、この植民地を日本人からどう守るかを外交に委ねた。

ドイツ軍の損失は死者170名・負傷者500から600名で、守備隊の残りはおそらく日本の寺に送られ、快活でとても思いやりのある勝者の手に委ねられている。最近マイヤー＝ヴァルデック閣下は、ある友人への手紙

で寛容な敵である日本との将来の同盟を勧めている。

包囲の仕方と捕虜の扱いは、世界で「武士道」として知られている日本人の戦争の進め方への高潔な理解から説明される。包囲は明らかに、現在ヨーロッパの戦場を支配しているやり方や憎しみに捉われていない。包囲の中での交渉が終り別れるとき、日本の将校は親しげに「また会いましょう」と言った。一度ならず日本の将校は障害設備の向こうの知人に挨拶を送ってその幸せを願い、皆が苦難を乗り越えるようにとの希望を伝えた。

日本部隊を丘からドイツの防衛線の前線にある丘から駆逐する命を受けた二つのドイツ中隊が出撃に失敗した後、神尾将軍は捕虜になった者の総リストを無線で伝えてきた。ドイツの司令官は別の機会に同様に好意を込めた対応をした。要塞が落ちたとき、敵対していた兵士の間で興味深い友好的なやりとりが交わされた。ドイツ側の数少ないイギリス部隊に対する感情はまるで対照的だった。イギリス兵が通り過ぎると憎しみを口にするとはなかったが、さげすむような眼差しや背を向けることでそれを表した。

私は丈夫なモンゴル・ポニーに乗ってチンタオを去った。ドイツ人が鉄橋を爆破して鉄道を使えなくしたからである。刺すような北風が乾いた木の葉を谷に吹き降ろし、日本軍の司令部が移ったモルトケ兵舎を揺すった。凍えた兵士は小さくくすぶる火の周りにうずくまっていた。中国人のクーリーが、ラバを追い食べ物をあさって道路をうろついていた。私は、最初の砲撃の頃に 100 人の中国人が死んだ台頭鎮を通った。地面のいたるところは大きな穴と砲撃の跡だらけだった。道路わきにはいまだに、何人かの勇敢な若者が彼らの天皇や皇帝のために命を捧げた真っ赤な血痕が点々としていた。それからわれわれは日本軍のたくさんの墓を通りすぎた。そこでもう一度最後に小さな街を振り返った。こちらにはオイルタンクのはちきれそうな残骸があった。港口にはまだドイツ軍が沈めた 3 隻の商船があって、煙突と索具の上の部分が見えた。街のこの部分を覆っていた回りの高地の間にある信号所の頂きにも、打ち砕かれた家が立っていた。赤い

レンガ屋根とたくさんの切妻壁によって、チンタオは今でもなお少なくとも外見では「海の向こうの小さなドイツ」だった。けれどもすでに日本人は、通りや丘に別の名前をつけ始めていたのではなからうか？

ハラキリ（１）

以前日本人を支配していた武士道精神にとって、これから詳しく述べようと思う「ハラキリ」、つまり腹を切り裂くことによる自殺の習慣以上にユニークなものはない。それが行われるのは、上から命ぜられた国事犯に対する罰としてか、汚された武士の誇りを取り戻そうとする自主的な贖罪としてである。けれどもこうした変わった自殺は、ほかの理由からもなされた。旅順を攻撃した乃木将軍も、天皇の崩御の知らせを受けると腹を切ってみずからの命を絶った。そうすることで彼は、天皇に対する愛情と敬意を示そうとしたのである。

腹を切り裂くことの本来の名称は切腹・割腹であり、「ハラキリ」はそれに対する通俗的な呼び名である。

優れた日本研究者の一人であるハインリッヒ・フォン・シーボルトは、この「ハラキリ」を目撃し次のように語っている。そのことはふつう夜に寺か屋外で行われるが、地位の高い人々だけは、友人や時には君主によってこの目的のために特別に設けられた部屋を用意された。これらの人たちは、自分の家や城を上^に述べた高貴な目的のために使うことを大変な名誉と考えたのである。部屋は日本人の喪の色である白い絹で飾られ、ごく簡素にすることが許された。切腹者もまったく同様な衣装を用い、ここでも指示に従わなければならなかった。

わずかの灯りだけが部屋を照らし不思議な薄明^{ひざ}に包まれ、選ばれた人が顔を北に向けいくらか高い所に跪ま^{ひざ}づいており、ほかの人々は彼を黙って半円に取り囲んでいる。

高い位置から「ハラキリ」が宣せられ、決定が荘重に読み上げられ、盆に載った4～9インチの簡素な白い絹に包んだとても鋭利な短刀が、儀式にのっとり荘重に運ばれる。

それから彼は最後の決意を述べ、すでに以前に特にこのために選んだ友に、自分が身体をしっかりと切ってから刀で首を切り落としてくれるよう頼む。それが決して断れない愛の奉仕なのだ。

切腹者は今や与えられた武器を握り締め決められた箇所をはだけ、この行為に高い道徳的価値を与えるゆるぎない平静さを保って左から右に4インチの深さに切ってゆく。後ろに控えていた友人は振り向きざまの一刀で胴体から首を切り落とす。そのうえ首はその場の人々に示される。

切腹を決意した者の最大の恥はそれができず、差し出された短刀を受け取ろうと身を傾けた瞬間に介錯で討たれることで、ふつうもっとも深い軽蔑の印とされている。

さらに厳しく彼に道徳的敗北を思い知らせるのは鉄ではなくて竹の刃や、それどころか女性用の扇子を渡されるときである。後者は、彼が男らしい行為ができないかそれに値しないとみなされた印なのである。

日本人はこのように「ハラキリ」の武士道に徹しており、ともかくそれをみずからの名を不滅にする男らしさの決定的な証拠とみなす。男らしさが何の苦もなく痛みを克服させるのである。これまで立派な切腹者で、うめき声が聞かれたり、苦痛の叫びを押し殺すことが自分にできるかどうかという疑念をはじめから言うような人は聞いたことがない。彼の友は、首をすばやく切り落として、雄々しい胸からため息が漏れる恥をかかせないことで、そのような者のよい名声を、確実に救うのである。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 17 問の解答

1. Kb4 - c4 任意の手
2. D か K で詰み

第 18 問の解答 a

1. Kf3 - e8
2. Td5 - d2 f4 - f3
3. Lf6 - g5 で詰み

第 18 問の解答

1. Te8 - a8 Kf3 - e2(f2)
2. Td5 - d2 + K を任意に
3. Ta8 - a1 か e8 で詰み

第 18 問の解答 b

1. Kf3 - g2
2. Td5 - d2 + Kg2 - h3
(f1, g1)
3. Lb7 - c8(Ta8 - a1) 詰み

W. J. へ あなたの第 17 問への解答は、詰みの場所が示されていないので不完全でした。この仕方では問題は解けません。あなたの第 18 問の解答は、2. Kf2 - g1 が失敗です。3. Te5 - e1+ に対しては Kg1 x h2 と応じられます。

正解は寄せられませんでした。

第 19 問

白：Kh1, Db8, Td1, Lh6, Sg1, f3, Bd3, h2

黒：Kf2, Tb4, Le5, Sa6, Bh4

2 手詰め

第 20 問

白：Kf8, Da7, Lc3, d1

黒：Kd5

3 手詰め

収容所生活から

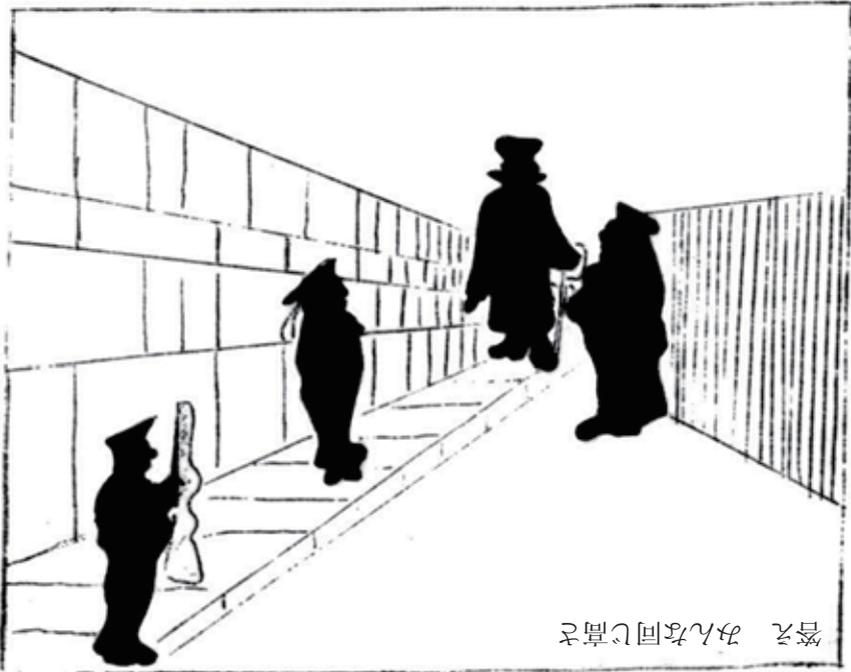
予告どおり今月 15 日に、宣教師のシュレーダー博士が収容所に来られ礼拝を行った。それはこれまでと同様にすばらしく荘重に進められた。博士は他の収容所仲間の挨拶を伝え、みんな元気だと教えてくれた。熊本収容所は夏は健康に悪すぎるので廃止された。そこの捕虜は福岡からの約 200 名とともに久留米に移送され、久留米は今や 75 名の将校と 1,300 名以上の兵卒のいるとても大きな収容所になった。一番小さいのは約 150 名の大分だが、ほぼそれに続くのがわれわれの収容所の約 200 名である。礼拝はまた、われわれの合唱団とオーケストラが技量を発揮する機会にもなった。ことに今回の式典は、チェロとバリトンのソロによって盛り立てられた。

何よりも残念だったのは、当分の間これがわれわれのオーケストラを聴く最後になったことである。今始まった蒸し暑い天候が何度も弦を切るといふ犠牲を強いるので、次の季節のために休まなければならないのだ。願わくば、この強要された休暇があまり長くなりませんように。



眼の錯覚!

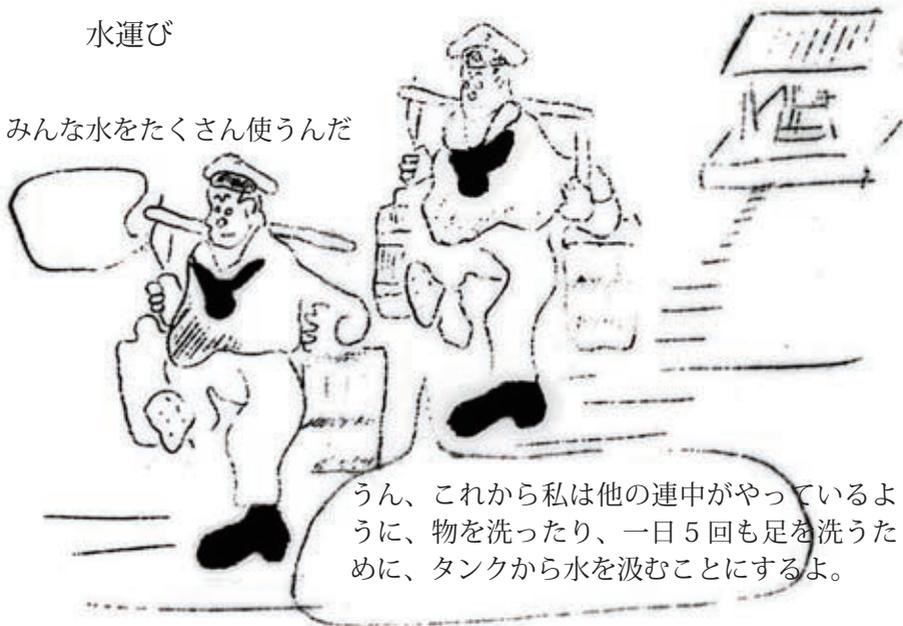
4人のうちで一番背が高いのは誰だ?



われわれの収容所生活からのさまざまな光景

水運び

みんな水をたくさん使うんだ



うん、これから私は他の連中がやっているように、物を洗ったり、一日5回も足を洗うために、タンクから水を汲むことにするよ。

彼らは次々に水を運ぶ

洗濯と調理と

初めはうまく

時とともにきっと

風呂のために

いかないが

やれるようになる

風が生暖かくなると

たくさんの方が散歩を

というのもそれは楽しいし

足の筋力を鍛えてくれる

するのを見かける

からだ



駆け足で

見張り台で



覗き見クラブは大人気
 彼らは毎日バルコニーから窺っている
 新しいものを見ようと
 ことに、娘さんが一人きりで通り過ぎるときに



どの端でも隅っこでも
 マンドリンの音が響く
 そんなふうに、昼も夜も聞いているので
 人も動物も怒り狂ってしまう



この男は優雅
 に、サッカーも
 できることを見
 せている

素敵なナポリよさらば

スポーツ!

このゲームはテニス

と言うんだ

今はもうかなりの

人々がしている

ラケットは力の

こもった音をたて

罪のない観客が

ボールをくらう。



土曜朝5時

